

学都松本

私はかねてから、我々が、人生をより良く全うするためには、健康づくりによって健康寿命を延ばすとともに、どんなに年齢を重ねても、自ら主体的に学んでいくという確たる姿勢を持つことが、大切ではないかと考えております。

幸いにも、松本市は、昔から旧開智学校の建設や、旧制松本高等学校の誘致などにみられるように、市民の学問に対する意識がことのほか高いまちでございまして、「学問の都・学都松本」として発展をしてまいりました。

私は、先人たちが築き上げてこられたこの「学都松本」を、改めて再認識していただくため、市民一人ひとりが健康な生活を送る中で、生涯にわたって、学び続ける姿が見えるまち、地域や行政が協働してサポートし、「共に学ぶまちづくり」を推進するまち、そして学んだ知識・技術を社会に活かし、次代に引き継ぐ姿が見えるまちを目指して、真の意味での「学都松本」を創造してまいりたいと考えております。

松本市長 菅谷 昭

「学都」としてめざすまちの姿

I

子どもからお年寄りまでが、生涯にわたって学ぶことができる環境が整い、市民一人ひとりが自らの意思で何を学ぶかを決め、学び続けるまち

II

市民一人ひとりの学びを地域や行政が協働してサポートし、「共に学ぶまちづくり」を推進するまち

III

市民一人ひとりが学んだ知識・技術を社会に生かして、次代に引き継ぐまち

自分を自分らしく生かしてみたい。自分を高めるだけ高め、深めるだけ深めたい。だれもが抱いているこの願いをだれもが実現できる—それが生涯学習都市です。

松本市民その一人ひとりが、願いどおりに学んで、枝を茂らせ、幹を伸ばし、つややかな葉を光らせ、素晴らしい森となるように、松本市の生涯学習事業を「学びの森づくり」と呼びたいと思います。

この構想は、市民のだれもが生涯を通じてみずから学ぶことにより、最も自分らしく充実して生き、生きることにより社会と好ましくかわり、「共に生きる幸せ」を実感できる人生を全うできる、そんな学びの森・生涯学習都市の実現を目標にしています。

この学びの森づくりのなかで、最も大切にされるのは、次の四つの原則です。

- 1 だれもが自由に学べること
- 2 だれもがそれぞれの学習について支援を受けられること
- 3 だれもが学習についての情報をたやすく得られること
- 4 だれもが学習の成果を社会に還元できること

これらの原則を、学習する権利、学習の支援を受ける権利、学習情報の提供を受ける権利、学習成果を社会に反映する権利—こうした権利にまで高めてゆくことが大きな目標です。

もちろん、市民一人ひとりのこうした権利を保障していく努力は、行政が果たすべきものですが、同じ努力は、家庭・学校・企業・身近な地域社会においても積極的に進められることが期待されます。

松本市生涯学習基本構想より

「学都松本」に向けて

いつでも・どこでも・だれでも、
みんな先生・みんな生徒



明治の授業

トライやるエコスクール事業

それぞれの学校が、地域住民や企業の協力を得て、農業体験学習、環境学習など特色ある取組みに挑戦することにより、人間性豊かな心を備えた児童生徒の育成を図ります。

「生きる力（キャリア教育）」育成事業

次代を担う青少年の「生きる力」、「社会貢献力」など社会の中で自立できる能力及び態度を育成するための事業を推進します。

学校サポート（学校応援団）事業

児童・生徒の健全育成を図るため、地域の多様な人材による「学校応援団」を組織し、学校・家庭・地域が連携して学校への支援を行います。

地域づくり懇談会（地域力・人材力の構築）事業

地域の課題解決のため、地区公民館がコーディネート役になり、地域住民や各種団体による情報交換や学習の場づくりを進め、人材の育成と地域コミュニティの再構築を図ります。

松本まると博物館構想

これまでの施設中心の博物館から脱却し、松本市域を「屋根のない博物館」としてとらえ、施設、資源、人のネットワークを構築するため、市民協働の視点から市民学芸員の養成、見学ルートの設定、体験型講座の開催など新たな博物館活動を展開します。

学都松本・博物館「勸館楽学」対談

松本まると博物館構想に基づき、地域文化や学びについて市民と学芸員などとの対談を行い、参加者からも自由な発言を求め、知の交流・発信を図ります。

明治の授業

重要文化財旧開智学校の教室や展示資料を使い、明治期の授業を体験することで、これからの教育について考えます。



「学都松本」の歴史

松本市は、三つの「ガク都」、「岳都・楽都・学都」を標榜してきました。

松本市が「学都」と呼ばれるようになった背景には、江戸時代に寺子屋の数が多かったこと、旧筑摩県の時代に「教育」を立県の指針としていたこと、明治時代には、市民の浄財をもとに初等教育の場として旧開智学校が開校されたこと、そして、大正時代には当時の市年間予算を超える巨費を投じて、高等教育の府である旧制松本高等学校を誘致し、「学び」を近代的な都市づくりの基軸に据えたことなどにあります。

このように、先人たちが残した思いや財産を大切なものとして継承するなかで、向学の気風あふれ、学びと文化芸術を尊ぶ松本固有の市民気質が育まれてきたと考えられます。

多かった寺子屋

そのいしずえには、江戸時代の教育熱があったともいわれています。松本藩内の寺子屋の数は天保年間(1830~44)にピークを迎え、松本を含む筑摩郡は信濃国内でも充実しており、江戸時代の教育熱がうかがわれます。



子守教育所の様子

ながやまもりてる

教育を立県の指針とした筑摩県

明治4年(1871)から始まった筑摩県の時代、初代参事(当時の知事)になった永山盛輝は、県のあるべき方向を教育におき、資金を集めて県学1校、郷学(小学校)10校を設ける計画を立てました。

明治5年5月、本町の女鳥羽河畔の全久院跡で県学が開校しました。翌6年、県学の教員の大半を受け継いで、開智学校が華々しく開校しました。同9年には、現在に残る立派な擬洋風建築の校舎が完成しています。このときの建築費の約7割が住民の寄附によりまかなわれました。上棟式には近郊近在から多くの見物人が訪れ、『信飛新聞』(136号)は「建物の出来は、目今、日本第一等の小学校」と伝えています。開智学校校舎の新築は、永山権令を頂点とする筑摩県が、教育を立県の指針とした象徴であり、新しい時代の到来を告げる大きなできごとでした。

その後も師範学校・中学校・高等女学校などが設置され、初等教育の環境は次第に整っていくことになります。



新築当時の開智学校

松本高等学校の開校と中等教育の充実

大正8年(1919)には松本高等学校が開校し、同12年には松本第二中学校が開校しています。さらに中等諸学校も開校するなど、大正時代には中等教育が充実しました。松本高等学校は小里頼永お り より なが市長らが積極的な誘致運動を行い、実現にこぎつけたものです。

第二中学校開校10周年記念式典で小里市長は、「この中学校が開校するというので大変うれしかった。県庁所在地の長野市には中学校と高等女学校は各1校しかないのに、この松本市には中学校も高等女学校も各2校ずつあります」と述べています。小里市長の言葉からは、教育の充実についての熱い思いを感じ取ることができます。

信州大学の発足など

昭和24年(1949)5月、松本医科大学、松本高等学校、松本医学専門学校、長野師範学校など8校が併合され新製の国立信州大学が発足しました。本部は旧松本歩兵第五十連隊跡地に置かれました。総合大学とはいえ、県内の官立・県立の高等教育機関を合わせたかたちで発足したため、当初は6学部が三市一村に分かれ「タコ足」大学とも評されました。

昭和28年に松商学園短期大学、同47年に松本短期大学が発足、平成14年(2002)には松本大学が発足しました。高等教育機関の充実とともに、松本は「学生の街」ともいわれているようです。

社会教育のきっかけ「明治三十七、八年 戦役記念館」

明治39年(1906)9月21日、「明治三十七、八年戦役記念館」が松本尋常高等小学校内に開館しました。これは日露戦争に出征した同校卒業生が、大陸の珍しい品物などを母校に寄附したことがきっかけで開館し、数年後には、早くも松本市の代表的な社会教育施設となりました。現在の市立博物館はその後身であり、平成18年に松本市より1年早く100周年を迎えています。



明治三十七、八年戦役記念館

また、図書館・公民館の活動は、松本の社会教育の名を全国に発信するとともに、市民の生涯学習を支えています。

文化の広まり高まり

昭和4年(1929)に発足した「話をきく会」は、この地方に新しい文化の種子をまいた知識の饗宴であったといえます。

昭和15年作成の松本市歌には、「宜しく学都と呼ぶべき此処に」とうたわれています。

戦後、市民は厳しい暮らしのなかで文化復興に立ち上がりました。バーナード・リーチらの指導による民芸運動の展開は荒んだ町に一つの方角性を示しました。



あがたの森文化会館(旧制松本高等学校)

昭和11年に国宝保存法により国宝に指定された松本城天守は、昭和25年から5年の歳月をかけて解体復元修理が行われ、松本の文化度をより高めました。

この百年、地域の文化は著しく向上しました。現在、学校教育とあいまって、社会教育・生涯学習の実践が盛んで、教育を尊重し、人づくり・まちづくりをする気風。そんな松本の伝統を継承する市民性が、「学都松本」を支えています。

井伏鱒二の小説「駅前旅館」に、「信州では山の中の馬子でも馬を曳きながら、中央公論とか文藝春秋というような雑誌を読んでいるそうだ」という一節があります。

「馬子でも」という表現に問題がありますが、一つの教育の姿を表しているのではないのでしょうか。

自分の仕事の影響を及ぼす範囲が、たとえどんなに狭く小さなものであったとしても、たとえば、本を読むことをとおして、いつも自分の生き方を省み、世の中のあるべき姿について考え、そして、世界や未来に思いをはせる。

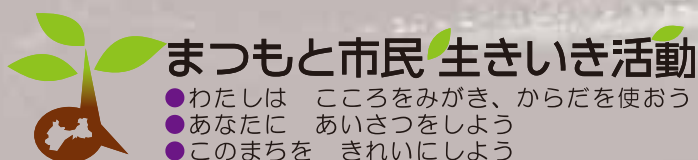
ここには、教育というものが、何より自分が自分で行う自己教育であること、他者や世界を視野に入れてなされるべきものであること、そして、日々の暮らしの中で生涯にわたって実践されるものであることが、はっきりと示唆されています。

これらは、長野県の教育が大事に守り続けてきた学びの典型ですが、松本市の教育も、このような伝統を受け継ぎつつ、教育と文化を重んじる風土の上に、すぐれた実践を積み重ねてまいりました。

この馬子のように、私たち一人ひとりが、自らを「途上にある者」として、人間であることに向けて真摯な自己教育を生涯続けていくこと。このことこそは、「人間性をつちかうことを重んじ」と市民憲章に謳う松本市の教育の水脈です。

今後も先達の思いを受け継ぎながら、次代につながる「学都松本」の教育の実現に向けて、取り組んでまいります。

市民の皆様のご理解・ご支援を心からお願い申し上げます。



発行 松本市教育委員会 平成23年3月発行

一人ひとりが あたりまえのことをこつこつと続けて かけがえのないのち 生きいきとかがやくように